

私はあの町を気に入っていた。だけど、昨日引越したばかりのこの町も好きになれそうな予感がもう既にある。質のいい古書店に、年代物のワインを揃えたワインバー、それとあの町で見上げていた空とはまた違った色の空。

ワインが入った紙袋の匂いをかぐ。独特な香りについて笑顔になり、い鼻歌をうたってしまう。

「~~~~~♪」

ワインと古本を一緒に入れた紙袋を片手に、スタンドグラスのきれいな教会の前を通りかかり、つい立ち止まる。

「……………」

以前の私であれば教会を見るたびに人目があるうがなかろうが中指を立てた私だけど、もう子どもじゃない。また歩き出して、角を二つ曲がって買い物客でよく賑わう商店街に入る。

「元気のある街だなア」

人の話し声でにぎわっていた。なのに、聞こえてくる限りでは汚い罵り合いはない。

「ほんとーに治安のいい街だな」

私はこの町に住む人たちと同じようにさっさと歩かずに、あちらこちらを物色しながら通りを進んだ。

「いい歳のとり方してるおじさん、りんご、頂きたいな」

「おお……そういうねーちゃんも美人だな」

「ハハ、よく言われるよ」

おまけは当然のように付けてもらえた。ラッキー♪

おまけで追加してもらったもう一個のりんごは紙袋に入れ、もう一個のそれはさっそくむしやりとかじりついた。

「！」

みずみずしく、あまく、齒ごたえがよい。おいしいりんごだった。

私は一番好きなのは最後に残すタイプで、おいしいものはゆつくりと味わうタイプだ。花屋、皮物屋、調理道具店、珈琲豆専門店と巡り、大通りから逸れた小路のフランスパン専門店に入るところで、やっとりんごを食べ終えた。おまけでもらったもう一個には手をつけてない。もちろん、ジュンにあげるため。

やや過ぎた重みの扉を開け、店に入る。店内は薄暗く、疑う必要も無く販売係と思われる女は若かったけど、客商売に向いているようには見えない雰囲気醸し出していた。私に向けられる視線は友好的じゃない。だけど敵意があるわけでもない。じゃあなにかと言うと「閉めようと思ってたのに、しかも面倒そうな客が来た」と言いたそうな視線だった。

だけど私はにっこりと笑って言う。

「——もう、閉めるところだったかしら」

「いいえ。まだ三十分はあります。貴方が来なければ閉めていたけれど」

しずかに鼻から息を吐きながら彼女は言った。弱々しさはなく、むしろ彼女が培ってきた強さが見えた気がして、言われた嫌味はまったく気にならなかった。

「そう！ならよかったわ」

陰鬱なことではないことがわかって、私はつい嬉しくなる。強かだわ、この人！

私は強かな女性が好きだ。逆に、弱いままでいいと思っている女は嫌いだ。

「このお店、歴史は長いのかしら？ 長そうだけど」

店内を見渡しながら訊ねる。よく手入れが行き届いてはいたが、そこかしこに年季の古さが窺えた。私は訊いてしまうほどに気になった。

「祖父の代からこの店を知っています」

「貴方の？」

「それ以外にあると？」

「ふふ、それもそうね。じゃあ戦前から続いているんだ？」

この町というかこの国は半世紀前まで民族紛争が続いていた。

「そうです。それで、何をお買い求めに？」

「ワインに合うパンはあるかしら」

流れるように話題を変えられてしまったけど、彼女にとって私はめんどくさい客だろうという理解もあつたので雑談を切り上げることにした。

強かな彼女は指を頬に触れさせて、一考するような素振りをみせた。そして「あ」と言った。

「ちょうど、値を下げたけど結局残ってしまったものがあります。それでもよろしければ」

「あら！ いいタイミング！」

決まってこれがいいというこだわりがあるわけでもないでそれを頼んだ。

「少し、待っていて下さい」

彼女はカウンター内から、のれんの先の部屋に姿を消した。

私はカウンターを離れて店内のあちこちを観察した。

アンティーク調の品々で落ち着いた雰囲気で色合いの店内が構成されている。振り子時計は私の覚え間違えでなければアンタルタ民族の工芸品で、店内を薄明るくする電灯に彫られた紋様はたしか南方の島国の貴族紋だったような。他にもいろいろある中で私が特に気になったのは、もうほとんど品物の置かれていない台だった。足が今にも歩き出しそうなふうに曲がっているのがとても特徴的だった。私はこういう机が欲しかったのだけど、ジャニスにははつきりとその要望を却下されてしまった。

そのことを思い出すと自然とくちびるがむっと突き出た。

のれんが揺れた。

彼女が持って来てくれたのは三つの棒状の長いパンだった。形状は同じだったが、色合いが違った。黒が二本、程よい焼き色の着いた一般的な色のものが一本だった。

「お待たせしました」

「あらずいぶんと大きいね」

「三本で一〇〇リルでいいですよ」

「もう少し安くできない？」

「……一〇〇リルでも破格なんですが」

「だめならいいわ。その値で買うわよ」

あっさりと切り上げてポケットからちようどの金額を差し出すと、彼女は意外そうな顔で硬貨を受け取った。そして袋に入れてもらったパンを私も受け取る。思ったよりも重い。袋を開けて匂いを嗅ぐ。黒い方は不思議と芳醇な香りがした。味が気になる。

「……」すこし、考える。

「お客さん？ もう店閉めたいんですけど」

そう言われたのと黒い方のパンをかじるのは同じタイミングだった。

「えっ」

気の抜けたかわいい声で彼女は驚いた。彼女の目を見ながらパンを咀嚼する。

「……（もぐもぐ）……（ごくり）……」

そして感想をひと言。

「おいしいね」

たしかにワインに合うわ。生ハムでもチーズでもサラミでも、なんでも合いそう。

「……いま食べます？ フツー」

「いやあ気になっっちゃって。味が」

一瞬目をまるくしてから、朗らかに笑った。頑なで強かな印象からはあまり想像できない笑顔だった。おどろいた。こんなふうに笑うんだ。

強かで固いだけかと思っていた彼女は、やや前のめりになった。冷たげに細められていた目があからさまに興味を持った目になっていた。意外とわかりやすいな、この子。

「どこから引っ越して来たんですか？」

「隣国から引っ越して来たの」

「移住ってことですか」

「そうだね。でも、なんで引っ越して来たの？」

「業者以外でこの店に来る人は常連さんだけなんですよ。それ以外の顔はみんな観光客か引っ越してきた人たち。それで、こんな時間帯に入って来る人で旅行者だった人はいない。まあ、引っ越してきたって人で通うように来てくれる人は今までにはいないのだけだね」

経験則に基づいて判断したらしい。だけどそれにしても最後の一言が引っかかった。

「こんなにおいしいパンが食べられる店だもの、私は通うわよ」

「だろうと思ったから訊ねたの」

堅苦しく棘のあった口調はいつの間にかやわらいで、  
「では、また」

と、最後にはやさしく見送ってくれた。

× × ×

アパートは商店街のある通りから少し離れた地区に建っている。周囲のどの建物よりも高い建物なので、迷わずに家に着いた。町のどこにいいのか分からなくなっても、見上げればどちらに進めばいいのかすぐにわかった。

「戻ったよー」

消したはずの電気が着いていたので、そう言って部屋に入った。

「あー、おかえりー」

出迎えたジュンは窓辺に置いた椅子に座って本を読んでいた。家具一式は部屋に元々備え付けられていて、そのひとつの椅子は落ち着いた色合いのこの部屋によく溶け合っていた。そこに座る彼も。しかし、なぜかこれから出かけるような格好でいるのが気になった。

「いい散歩ができたか？」

「うん。いいお店見つかったよ」

立ち上がった彼に近寄り、静かに口づけする。

「それはよかった。買い物もずいぶんと捗ったみたいだな」

「うん。あ、これ、りんご」

「え、ああ、ありがとう。……なぜ？」

答えるよりも先にパンとワインと古本を机に置く。

「あー重かった」

「なあ、なんで？」

「おまけでもらったの」

「なるほどな」

むしろりと豪快にかぶりつく。いい食べっぷりだ。私の三分の一ぐらいの時間で、あつという間に食べ終えてしまった。

「そちらの面白い物はどうだった？ いい食べ物見つかった？」

「もちろんだ。行く店行く店で教えてもらったよ」

どれ？ と目で尋ねる。

「持って帰ってくるの面倒だったから配達お願いした」

「じゃあこれから届くの？」

「ああ、もうすぐ——いま来た」

ジュンは窓の外を見ていた。同じように顔を出す。青年がアパートの前に立っていた。

「ジュンさーん、来ましたよー」

よく張った大きな声だった。

「エルミー、ここー」

ジュンが手を振って見上げる青年にそう言うと、青年は快活に口もとをほころばせて手を振り返してきた。一瞬だけ私を見た目はすこし意外そうなものを見る目に見えた。

「だれ？」

「途中で知り合って仲良くなって一緒に——」

「飲んだんだ？」

しまった、と思ったみたいだけど、時すでに遅し。

「いやー……すまない、仲良くなって楽しくなってしまっ……」

「……まあいいよ、何もなかったのだし、今日ぐらいはね」

そう言うと彼は、私が怒っていることに納得してなさそうな顔を見せた。私はさらに言葉を重ねる。わかっていないのならわかってもらうよう努めるしかない。

「なんのために亡命したのか忘れたわけじゃないでしょ？ 長生きしたいんでしょ？」

ジュンは私の顔を見て申し訳なさそうな顔をした。

「ごめん」

「どこに誰がいるのかもわからないんだから、用心して」

私というか、彼は母国から追われてここにいる。そのことを私の方がよく理解しているよ  
うな気になってしまう。それでは困る。さっきまでの和やかな雰囲気は彼の自省によって部屋  
の角に圧されてしまう。

「……………」

ああもう。こんなこと、できれば言いたくなかったんだけどな。恥ずかしいから。

「私はあなたが金持ちだから誘いに乗ったわけじゃないの。あなたはたしかに問題のある人だ  
けど、あなたみたいな人にもう二度と会えないリスクの方が大きいと考えたから、あなたの誘  
いを受け取って呑んだのよ。それを解って」

「……ありがとう」

ジュンは立ち上がり、私をそっと抱きしめた。それを受け入れながら訊ねる。

「で、彼は誰なの？」

二度のノックが響いた。

「お熱いところ申し訳ない」

いつの間にか入って来ていた青年が、代わりに答えた。

「僕は普段はしがない学生で、今だけはジュンさん専属の配達人です」

まるで映画のセリフみたいだ。短く切り揃えた髪型の男にしてはやけにキザな男だと思った。